

棋士の情景

～勝負の巖かでは、どんな時代も変わらない～

棋士・九段 島 朗

(第17話)

神の手

日頃お世話になっている、整体の先生からご連絡がありました。折り返しお電話すると、お嬢様がいられて「父の具合が急に悪くなって、しばらく治療ができないと思うので、予約を頂いた方にご連絡を差し上げている次第です」と、思いもかけないことを伝えられました。ご快癒の祈念をまずはお伝えし、驚きで思いを馳せました。

当初、本欄でもおなじみの森下九段からご紹介してもらい、これまで数多くのピンチを救ってくださり、私たちの間では「神の手」と呼んでいました。三度目のぎっくり腰のときも、力技をかけることなくさるような治療で帰路につくときに完全に治ったこともあり、まるで魔法をかけられているかのようでした。

治療だけでなく、もの静かで悟りを開かれている先生のお人柄も魅力で、お話しをするのもとても勉強になり楽しみでした。

自分が三十代後半のときは頸椎ヘルニアに悩まされ、A級順位戦の対局の朝も「一日もつかなあ」と懸念を持ったまま盤の前に臨んだことがあります。お相手は、先日ご逝去された加藤一二三九段でした。

午前中、いっこうに痛みが治まらず、正直対局どころではありません。そのころお昼の休憩は50分間で、外出自由だった時代でもあり、11時30分頃に一手指して、記録係に「相手が指されたら休憩にしてください」と告げ、先生のところまに直行しました。相手が指せば、私の持ち時間が消費されます。再開時刻の13時にすら到底間に合うとは思えなかったのですが、自身の持ち時間が1時間以上削られても、少しでも症状が和らげばどうということはないので、連盟を後にしました。

結局、盤の前に戻れたのは13時30分過ぎ。

局面が動いておらず、まだ指されていない様子でした。

私の持ち時間は全く減っていないのですが、それとは別に大先輩に対してずっと離席していた申し訳なさも少々感じていましたが、どうやら加藤先生も昼前に外出され、まだ戻ってきていない雰囲気がありました。後で職員さんに聞いたら「ああ、先生にはよくあることですよ。昼に教会に賛美歌を歌いにいき、自らの闘志を高められているようです」と聞いて驚きかつ安堵した記憶があります。

加藤九段は序盤での謎の大長考で、時間の浪費（としか周囲には見えない）をされ、わざと時間切迫に自身を追い込んでいた節があります。時間が減る辛さよりも、気持ちを高めるための消費時間というもの、どこかわかるような気がします。いまの若者が聞いたら、不思議な顔をしそうなお話ですが。

整体の先生が体調を崩され、加藤九段のご逝去が続き、ふとそんな思い出が蘇りました。

私は不思議と、四十代半ばで一線級から落ちてから（いつも思いますが、五十代後半でも強さを維持する羽生世代が、空前絶後の存在なのです）さほど昔のような激痛からも解放されました。たぶん、トップグループで戦っていた頃は、得るもの大きさと引き換えに、精神の抑圧も大きかったのでしょう。アーネスト・ヘミングウェイは「勇気とは、プレッシャーに耐える気骨だ」と定義されていますが、棋士も、精神的にきつい時代こそが一流で戦っている証かも知れないな、と今の年齢になって改めて感じたりします。

でもいまは将棋を楽しんでいて、これはこれで別の幸せを感じてはいるのですが（笑）。